
海送り -sea saw-

est

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海送り - sea saw -

【NZコード】

N6802C

【作者名】

est

【あらすじ】

僕には幼なじみが二人いる。片方は大切な親友でもう片方は大事な恋人。けれど、そのうちの親友はもういない。これは、いなくなってしまった影を追い続ける「僕」たちの小さな物語。

第一話（前書き）

夏ホラーにて出展予定だった作品ですがホラーはありません。
知り合いには夏ホラー参加拙作の「箱と少年」とは違う人間が書いたんじゃないのかとまで言われました。

読みやすい文体で書いているつもりなので、どなたでも読めるはずです。

過ぎてしまった夏の空気を感じて頂ければ、そして読んでくださった貴方が何かを心に思ってください。

それではしばらぐの間、お付き合いでお願ひします。

第一話

潮騒は、一瞬にして悪魔の笑い声へと変貌した。

厚い雲に覆われた空はまるで真っ黒な血をぶちまけたかのようで、次々と迫り来る波は何もかもを奪い去りに来たかのように見えた。そして頬を撫でる潮風は、僕のことを嘲笑っているかのように気持ち悪く吹いた。それは絶望の光景だった。

僕は激しく後悔した。どうしてこんなことになってしまったのか。浜辺でへたり込みながら、両手の爪を顔に食い込ませ、気が触れたかのように絶叫しながら、止めどなく涙を流したことを僕は今でも覚えている。

猛り狂った青黒い怪物を前にして、僕達はあまりにも無力だった。

海送り - sea saw -

自転車の荷台に人を乗せて走ることにも、随分と慣れたと思う。最近ではカーブに差し掛かっても転びそうになつたりすることはなくなつた。最初の頃はバランスを崩してよく転んだりしていたものだけれど。乗せられる方も随分と慣れたようだつた。怖いからスピードを落とせとか、脚に変に力入れて筋肉痛になつたとかいう話も最近では滅多に聞かない。

「涼しいね、今日」

ミサキの高い声が後ろから響く。僕はやる気のない声で適当に返した。後ろが涼しいのは乗せられているだけで他には何もしないからだ、前で漕いでいる方は汗だくで息も絶え絶えでもう死にそう

なんだぞ、とは言わない。

夏休みが始まる日に、こうしてミサキと一人乗りをしながら高台を目指して走るのも、もう一回目になる。それは僕が親友を失つてから一回目の夏が来たということだった。そして同時に、ミサキが双子の兄を失つてから一回目の夏が来たということでもある。僕達にとつて、今日という日は特別な日だった。

蝉の声が、うるそく響く。

僕は小学校に上ると同時に、この海辺の町に引っ越してきた。それまでは都会に住んでいた僕にとって、ここは未知の世界以外の何物でもなかつた。父親がどうしてここにマイホームを建てようとしたのかは僕には分からぬ。それは例えば、自然に溢れた田舎町で僕を育てようとしたからなのかもしぬなかつたし、ごみごみとした都会に疲れてのびのびとした場所に住みたいと思つたからなのかもしぬなかつた。

ところがいざれにしても、当時の僕には家の周りに当たり前のように存在している海とか森とかの自然が悪夢にしか思えなかつた。狭い路地や密集する団地がそれはそれは恋しかつた。こんな場所で生きていくのが、小学生にもなつてなかつた僕がそんなことで悩んでいた。今思つと、あまりにも大袈裟で心底笑えてくる。

というのも、思つたより早く というか一瞬にしてこの町に打ち解けることが出来たからなのかもしぬないけれど。

要はきつかけさえあれば何でも良かつたのかもしぬない。子供は案外早く環境に適応できるものであるらしく、僕には友達が出来たということが大きく作用して、結局のところとかからずにここを受け入れることが出来てしまつた。

引っ越しした先の隣に住んでいた、双子の兄妹。エイジとミサキ。

一人がいなかつたら、僕はこの自然に飲み込まれてしまつてい

たかもしれない。

二人にはとても感謝している。

それにしてもこれがとてもなく明るい性格をした一人で、僕らは会つてすぐに、まるで生まれる前からの友達であつたかのように仲良くなれた。とにかく馬が合つたということなんだろうけれど、今にして思えば、なかなか奇跡的のことだつたような気がする。

それも、もう10年も前のことだ。

走りながら帰る六年生くらいの小学生の一団と、すれ違う。この時間に下校しているということは、今日は僕達と同じで終業式だったということなのだろう。

彼らが急いでいるのはきっと、今夜から明日にかけて行われる、この町のとある大きなお祭りに参加するための準備があるからだ。家に着くなり、押入れの引出しの上から一番目辺りに入っている浴衣を取り出したりするんだろう。ところで僕達も運営側の準備を手伝わなければいけないから、夕方には町役場に行かなくてはいけない。何しろ近くの市町村から、町の総人口が2倍になるんじゃないかと思えるくらいにお客が集まる、そんな大規模なお祭りなのだ。おかげで地元の高校生や中学生もいろいろな仕事に借り出される。過疎が進むこの町では人手が不足しているのだろう。

小学六年生か、と僕は小さく呟く。ミサキは特に何も返さなかつた。聞こえなかつたのかもしれないし、何も反応しなかつただけなのかもしれない。何にしても黙つてくれているのは、今はありがたかった。

高台の入り口に入った。

道端に乾いた唾を吐きながら、ペダルを漕ぎまくる。このまま直進をすれば、目的地に辿り着ける。心臓破りの坂を越えれば、あとはもうこっちのものだ。

ここを一人乗りで登り切るにはコツがいる。僕は勢いを付けて助走を始めた。ちょうどその時だった。

ミサキの僕の腰に回した腕に、ほんの少しだけ力がこもった。僕は敢えて気付かないようにする。でも、理由は分かっていた。僕達が目指しているのは、高台にひつそりと作られた、海で亡くなつた人のための慰霊碑が置いてある墓地。

エイジの名前が彫られた石碑がある、その場所なのだ。

五年前にエイジが死んだ時、ミサキは大声を上げてわんわん泣いた。壊れたみたいに、泣きまくつた。僕も泣いた。一人で泣き明かした夜を忘れるとは、きっと死ぬまでないと思う。

ミサキは思い出しているのかもしれない。毎年夏にここに来ると、いつも明るく笑う彼女が嘘みたいに静かになつてしまつ。田が虚ろになつて溜め息ばかりを繰り返す、そんなミサキを見るのは、僕にはつらすぎる。

彼女の胸の感触を、薄手の夏服の背中に受けながら、僕はそのことがとても嬉しいくせに、切なく悲しい気分を味わっていた。勢い良くペダルを漕ぐ。もう坂も中盤だ。

ところで、そんなミサキに告白をされたのは今から1年と3ヶ月前、高校生になつてまだ間もない頃だ。

ミサキとは本当に長い付き合いで、小中と同じ学校なのは当然でも、とうとう高校まで揃つてしまつたと分かつた時には思わず笑つてしまつた。家が隣同士で高校まで同じな男女なんて、マンガの中にしかいないものだと思っていた。これでクラスまで同じだつたらもう死ぬまで一緒に気がしないでもないと、互いに笑い合つたりしたのが中学卒業記念のクラス会。まさか本当に同じクラスになつてしまつとは夢にも思わなかつた。

笑うしかなかつた。

そんな彼女とは、僕はずつと腐れ縁を続けていくんだろうと勝手に思つっていた。でも、それは違つた。彼女の方はそれでは満足しなかつたらしく、本当に突然、誰もいなくなつた夕暮れの教室で不意打ちを僕に与えてきたのだ。

「私さ……ツカサが大好き。だからさ、私と付き合つてよ」
実に彼女らしいストレートな物言いだつた。それもただの「好き」ではなく「大好き」らしい。勿論僕は呆気に取られて何も言えなくなつてしまつた。まさか来るはずがないと思っていた相手からの突然の告白。しかも夕暮れの教室。もう何から何までマンガみたいだつた。彼女の告白は続く。

「そつちは全然気付いてなかつたと思つけど、私ずつと、ずつと前からツカサが大好きだつたんだからね」

そして実に彼女らしく、追い討ちまで仕掛けてきた。悪戯っぽくにんまりと笑つて、言つちやつたと彼女は笑つた。それは随分と嘘くさい笑顔で、それを見た僕はここでやつと、笑いながらも声を上げることが出来た。

「僕だつて」

ミサキの顔が、今度は優しさにほんの少しだけ切なさを混ぜたような笑顔になつた。短く切り揃えられた黒髪が、夕暮れの風に靡く。それは、可愛いを通り越した、言葉では言い表せないような笑顔だつた。

告白されてから初めてのキスまでたつたの3分だつた。キス。初めてだつたくせに、それはまるで大昔から知つていた動作だつたかのようで、不思議だつた。

ミサキは激しい性格をしているけれど、かなり可愛い女の子だ。と僕は思つてゐる。

中学生も後半の頃に、彼女は化けた。小学生の頃は男の子に間違えられるようなタイプの、あまり可愛いくない女の子だつたけれど、ちょうど背が伸びなくなつて胸が膨らみ始めた頃から、彼女は徐々に可愛い女の子に変化をしていつた。彼氏の一人や一人くらいいてもおかしくはなかつたような気もするのに、不思議とそんな浮いた話は聞かなかつた。だから恋愛には疎いのかもしれない、そう勝手に決め付けていた。

疎かつたのは僕の方だつた。幼馴染みの恋愛といつのはちょっと特殊なものかもしれない。

例えば、お互いの好き嫌いなんてものは、自分のこと以上にお互いがよく分かつていて、大した話もしていないうちから、二人はお互いのことを当然の如くよく理解してゐた。僕達には、いわゆる付き合い始めた二人がゆっくりと登る、お試し期間と大きく書かれた階段は全く用意されていなかつた。いきなり、恋愛1年目に突入したような慣れがあつた。

家が隣の幼馴染み、といふのは大きい。

これがもしも高校で初めて出会った一人なら、付き合って3週間でもう一緒にベッドに潜ってしまっていた、なんてことはなかなかないと思う。初めでは僕の部屋だった。2回目はミサキの部屋。それからお互に部屋をランダムに行ったり来たり。財力に乏しい高校生の恋愛生活はどちらかの家の親や兄弟がいない日とというのが原則で、それは今でも続いている。

それにしても、3週間というのは少し節操がなすぎたかもしない。少しだけ、反省している。

僕達の恋愛は、じつやつて続いている。

高校生の恋愛にしては、当り障りのない方だと思う。

何にしても、僕はミサキと一緒にいられることがとても幸せで、それがこれからもずっと続していくことを心から望んでいる。ミサキとこれからもずっと、と考えるとそれだけで心が温かくなる。本当に。

でも、それだけに、越えられない壁というものに気付いてしまった時に、悲しくなることがある。僕はミサキの心の中の、ある大きな壁を越えることが出来ずにいる。

厄介なのは、ミサキ自身がその壁を、認知していないだらう」とだ。

それをもうずっと、言えずにいる。

坂を登り終えたら、墓地はもうそこにある。

海が見渡せる場所にひつそりと建っている慰霊碑を囲むよつじて多くの石碑が並んでいて、その一つ一つに名前が彫られている。僕はそれら一つ一つを見る度に、胸の底が苦しくなる。海で死んでいった人々のことを考えると、息が詰まってしまう。親友を失つ

た僕にとつては、それは決して他人事ではなかつた。兄を失つたミサキにとつては、僕なんかよりもよっぽどつらいものに感じられるかもしれない。

僕は自転車を停めた。かごの中の鞄から、紅茶の入つた水筒を取り出す。

ミサキがゆっくりと荷台から脚を下ろした。短いスカートから伸びる太くも細くもない脚は、どことなく震えているように見える。

僕はミサキの手を取つて、エイジの墓に向かつた。

墓といえど、エイジの骨がこの石碑の底に埋まつてゐるわけではない。

エイジの死体は、とうとう海から上がらなかつた。

他の墓も、きっと同じようなものだと思つ。

僕は水筒の蓋を開けると、ぬるくなつてしまつた紅茶をエイジの墓に向かつて注いだ。冷えた苦いストレートティー。そんな子供らしくない飲み物がエイジは大好きだつた。

「ごめんな。冷えてなくつて」

返つてくる言葉は勿論ない。遠慮のない笑顔で笑うエイジを思い出して、少しだけこみ上げた。息を大きく吸い込んで、やり過ごす。

「久しぶりだね。お兄ちゃん」

ミサキは虚ろな目をしながら、墓に向かつて笑いかける。それは力のない笑顔で、僕の前ではあまり見せようとはしない類のものだつた。

ああ、と思う。心の中で、小さく黒い気持ちを育ませる。決して認めたくない僕の越えられない壁が、ここにある。

ミサキにとつて、エイジの存在は大きすぎたんだと思つ。双子だから、とこりうものを越えたところで。何か、自分の中の大事な何かが欠けてしまったような喪失感みたいな、あるいは決して手が届かないところに手を伸ばそうとする悪あがきに似たようなものか、とにかくそういうものを、ミサキの声や顔は毎年のように主張していた。

ミサキは、毎年のエイジの命日にこじへやつて来ては、虚ろな目をしたまま墓に向かつて語りかける。傍から見れば、それは痛々しい以外の何物でもないことで、僕はそんなミサキが好きではなかつた。一度、やめるように言つたこともあつたけれど、彼女はこれをやめようとしない。僕はさつきとは別の意味で、涙が出そうになつた。

僕はエイジを越えることが出来ないかもしない。死者はそういう部分で、ほぼ完璧といつていよいほどに最強なものに思えた。ミサキの亡靈のような笑顔を見れば、そんなことは火を見るよりも明らかだつた。

僕の中で、意味の分からぬ黒い感情が募る。

死んだエイジに対する嫉妬。でなければ、いつまでも死んだ兄から離れられずにいるミサキへの苛立ち。もつと自分を見てくれと、そういう情けない願望も混ざつてゐるかも知れない。

いずれにしても、本当はそんなものは認めたくなかった。

そんなものを抱え込んでいる自分はひどくちつぽけに思えた。親友を失つたという純粹な悲しみを越えたところで嫉妬をし始める自分なんて。けれど、それを覆せるほどのみとりを持つことも今の僕

には難しかった。抑えようと、必死に抑えようと、僕は自分に思い聞かせる。

ミサキの棒のような呼びかけは止まらない。

やめろよ、と囁く。やめてくれ、と囁きたい。

斤思いならまだしも、というものがあつたかもしれない。それならば僕の思いは一方的なものに過ぎなかつたのだから。でも、今は違う。僕は彼女の思いを受け止められたと思つていた。そのはずだつた。

それなのに、エイジからずっと離れられずにいる彼女は、ひどく残酷な気がした。僕は一体何のために彼女と一緒にいるのか。彼女は何のために僕と。

僕は、エイジの代わりになつたつもりはない。

ここまで来ると、僕の中のミサキへの気持ちは黒いモノに化けつつあつた。一方的に募らせた憎しみのようなものになつてしまつた。

毎年のように繰り返されたこの行動に、僕の我慢はどうとう限界を振り切つてしまつたのかもしれない。この時僕は、明らかにキレていた。

だから僕は、瞬時に思い浮かんだ最低な考え方を、それを実行することに決めた。

僕はそれをミサキに語られないようにして、小さく溜め息を吐いた後、両手を合わせて瞼を閉じた。

「ごめん、とは思わなかつた。

後悔するだらう、とは少しだけ思つていたのが、悲しい。

ここがエイジの墓の前だということなんて、すっかり消えてしまつていた。

「そろそろ帰ろつか」

散々あやしい語り掛けを終えた後で、ミサキがそう言つた。それ待つっていた僕は、優しいフリをして笑いかけ、彼女の腕を引いた。

「その前に行きたい所があるから、寄つていつてもいい？」

そもそも、本当はエイジを悼む気持ちがあつたわけだし、それは今だつてしまつかりとある。別に、こんなことを最初からしたかったわけではなかつたと思つ。

そうだ。そのはずだつた。

そうだと思つたからだ。

墓地の近くには、先日廃館が決まつた公民館がある。

もつと駅の近くで利用しやすい土地が空いたので、そこに移転することになつたからだ。

以来、墓地の近くといつことが災いして近所の小学生には幽霊屋敷と言われたり、夏の夜には肝試しに使われたり、そんな風にして取り壊しの日をこの公民館は待つてゐる。でも、ここも僕らが小学生の頃は立派にその機能を果たしてゐたのだ。ここにまつわる思い出も、僕やミサキはたくさん持つてゐる。エイジが関わつた思い出だつて、たくさん。

そんな場所に彼女を連れ込むことなんて、造作もないことだつた。制服を乱暴に脱がして、半ば裸にさせた後、僕は彼女に覆い被さつた。無理矢理にその唇を埋めると、彼女の抵抗が露になつた。突き入れた舌を噛んできた瞬間に、僕の中で何かが爆ぜた。もうメチャクチャにぶつ壊してやろうと決め込んだ。

胸を驚掴みにすると、彼女の口から初めて、やめてと叫ぶ声が弾けた。

絶対にやめてやるものか。僕は狂つた動きで彼女の首に齧り付く。お願ひだからやめて、と悲痛に叫ぶ。その声を無視して、僕は彼

女の下着の中に指を忍ばせた。彼女の抵抗が激しくなる。それを僕は鬱陶しいとしか思わなかつた。

このまま、彼女を犯すことに、僕は何の抵抗もなかつた。

畜生。畜生。畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生
んな言葉ばかりで頭の中が埋まっていた。

僕はここにいる。僕はここにいるだろ。こんなに大好きなのに。
エイジはもう、いらないの。

その時は、気付いていなかつた。いきなり彼女が抵抗することをやめて、僕にはそれがなぜなのかさっぱり分からなかつた。

「ツカサ……」

ミサキが哀れむような、申し訳ないような目で僕を見つめた。さ
っきまでの僕を恐れていた目は、もうそこにはなかつた。

「うめん。私のせいだね」

声に出ていた、と気付いたのはその時だつた。頃の中が、真つ田一派の事。

僕が何をしようとしていたのか。それを瞬時に理解し、途端に自分が怒りがふつふつと湧き上がってくるのを感じた。彼女に対する嗜虐心が消え去つて、代わりに生まれたのはどうでも続くような自責と後悔と、申し訳なさ。

何で！」とを
してしまったんだ

- ごめん

陳腐に謝罪をし始める自分はとても汚らしかった。自分の全てを、今ここで切り刻んでしまえればどんなにいいか。心底、自分はともないバカだと悟った。

「そんな僕に、ミサキは、何も言わずに抱き締めて、言つた。

結局、彼女を犯すことはなかった。でもだからってどうしたもこうしたも、ない。

僕は彼女を犯そうとした。それだけが真実だった。
彼女は僕に笑いかけて、私が悪かったと、私のせいだと、だから僕を許すとそう繰り返した。でも、僕にそんな資格はないと思う。決して彼女は僕の頬を平手で叩いたり、拳で殴ったり、罵ったりはしなかった。出来ることなら、平手打ちでも罵倒でも何でも良かったから、彼女に嫌われてしまいだつた。

僕は、とんでもないバカだ。

自転車で坂を下りながら、僕と彼女は何も話さなかつた。
夕暮れがとてつもなくきれいで、僕はこのまま消えててしまいたいと、切にそう願つた。

家の前で彼女と別れる時に、彼女は僕に向かつて話し掛けてきた。

「明日、一緒にお祭りに行こうよ」

何を言い出すのかと、僕は正直わけが分からなかつた。

「いいから。行こうよ」

僕の気持ちは見透かされていたと思う。それなのに、僕に行こうと誘う彼女の気が知れない。どういうつもりなのだろう。

「じゃあ、また明日ね。6時にここだよ。それじゃあね」

一方的に言うだけ言って、彼女は玄関の先に消えてしまった。

僕は目の前が真つ暗になつた。

家に帰った僕を待ち受けていたのは、今夜からのお祭りでの仕事の依頼だった。

僕達17歳の男の子のうち抽選で選ばれた人は、特別に護人の仕事を毎年のように任されていた。正直そんな気分では全くなかったけれど、僕は出掛けることにした。何かやらなければいけない。どこかでそう考えた結果だった。

この町には、古くから伝わる夏のお祭りがある。

毎年同じ日時で一日に渡って行われ、二日目には花火が上がる。花火云々については随分と最近になってから始まつたことで、それは他の地域からやって来る人に合わせるために作られたイベントだった。

このお祭りの本来の意図は別のところにある。

このお祭りは【海送り】と呼ばれていて、海で亡くなつた人々の魂に安息を与えつつ畏敬の念を込めて、お祭りの日だけこちらの世界に呼び寄せた後、再び海へ帰すという意味合いが込められている。そのことをしつかりと念頭においてお祭りを運営している人は、もう老人くらいのものだと思われけれど、でも風習として現代でも続いている行事はしつかりとあつた。

それが舞児であり、護人である。

舞児というのは、この町で16歳に当たる女の子数人に舞を踊らせて、海から魂を呼び寄せるというものだ。古くから伝わる舞児用の衣装に着替えて、華麗に舞う姿は必見と、旅行ガイドに載つてしまつたりもする。彼女達はもっぱら町役場の公会堂で、夜に舞を踊ることになつてている。夜の海の方が、澄んだ魂が帰つて来やすくなるという伝統があるからだと聞いているけれど、詳しいことは僕も知らない。

ちなみに舞児はその後で体を清めなければならないため、汚れた外気に触れさせないために踊つた場所でその日は寝泊りをしなくてはいけないという決まりがあり、つまりは踊つた場所が町役場なら、役場内でその日は過ごさなくてはならない。

ここで意味を持つのが護人。その時に悪い魂を引き寄せないよう
にと、舞児達の寝所を交代で番をするのが彼らの仕事である。それ
はこの町で17歳に当たる男の子数十人に任されることで、こちら
も古くから伝わる武人のような軽装の衣装に着替えることが原則と
なっている。ちなみに護人も、交代で見張るという任務のためか、
この町役場で寝泊りをしなくてはならない。

と、要は古い言い伝えを現代になつても踏襲しているといふこと
だつた。お盆の風習がこの町独特の形を取つたと考えてもいいかも
しれない。

この護人に、僕は今年選ばれてしまつたらしい。

その時僕はなぜか、嫌だと思いつつ何だか救われたような思いが
した。それがどうしてなのかは、分からぬ。

そろそろ出掛けないと間に合わないわよ、と母親の声が家の奥か
ら響いてくる。

僕はそれに応えないまま、家を出て行つた。

護人という仕事は何で暇なのだろう。

駅の方に住んでいる先輩に話を聞いたことはあつたけれど、これ
ほどまでにひどいものだとは想像していなかつた。ただ、町役場の
前に数人で立つてゐるだけという、本当にただそれだけの作業。こ
れは拷問だと、すぐにそう思った。他の数人と仲良くなることも出
来ただろうけれど、残念なことに向こうは向こうで既に知り合いが
組まれていたようで、僕が入り込む隙間は微塵もなかつた。居心地
が悪いことこの上ない。

おかげで、僕は散々昼間の自分を責めたてることが出来た。

こういったマイナス思考の螺旋に引っかかることは自分には無縁
だと思っていたけれど、いざ嵌まつてしまつと抜け出すことは不可
能だと悟つた。

どうしたって、自分を許す気が起こらない。

当たり前だ。僕はミサキに最低なことをしたんだ。

もしもエイジが生きていたら、彼は僕にどんな言葉をかけただろう。僕を殴り倒してくれたかもしれない。そんなことを少しだけ思つた。そういえば今の僕は護人だ。エイジの魂が会いに来てくれるなら、会いに来て欲しいと、今度は心からそう思った。

僕を罵倒するなら、そうして欲しい。今ならどんな扱いを受けても構わないとthought。

向こうが望むなら、僕を殺してくれてもいい。

そういうえばエイジは妹を大事にする兄貴だった。同じ歳のくせに、いつもミサキに兄貴風を吹かせて。そんな仲の良い兄妹に入り込んだ自分は、二人に何もしてやることが出来なかつたと思う。与えてやるどころか、エイジには何もしないうちから彼とは死に別れてしまつて、妹のミサキからは奪うばかりで……。

交代だ、という声が聞こえてきて、僕は初めて自分が泣いていることを悟つた。

涙を拭つて、僕は頷く。やつと交代だと思う一方で、もつとずっとこのままこの場所に留まつていていいという思いがした。

「誰が大事な人を、海で亡くしたのか？」

僕の涙を見た町役場の職員が、おずおずと尋ねてきた。随分と無遠慮な人だと思う。僕はもう一度、深く頷いた。今泣いている理由はそういうた美しいものではなかつたけれど。

「そうか……。今日はもう寝るといい。護人用の部屋に布団が敷いてあるから」「

はい、と短く返事をして、僕は町役場の玄関の中に入つていった。

夢を、見ていた。

校長先生の長い話。

そう。最後の砦は、校長先生の長い話だった。これさえ終われば、僕達の夏休みが始まる。田の前に広がっていたのは、規則正しく並んだ生徒たちの列でも、校長先生の生い先短い髪の毛でも、大あくびを惜しげもなく晒す生活指導の先生でもなかつた。真夏の青い空と蝉の声であり、苺味の力キ氷と夜空を彩る花火であり、エイジとミサキと約束した、両家の旅行先の光景だった。それさえあれば、山のような宿題も、成長が伺えないことが予想される通知表も、大した問題ではなかつた。小学生最後の夏。

夏休みをそんな都合のいいもので埋め尽くせるほどに、その頃の僕達は幼かつた。

台風が近付いている。

そのことが、終業式を一日だけ早めた。そのことが、僕達をひどく浮かれさせたんだと思う。

先生は、早く下校をするようにと再三に渡つて言い続けた。決して、寄り道などしないで帰れと。台風が近付いているんだと。

僕達がもう少し賢ければ、先生にも迷惑をかけずに済んだのだ。当時は何も分からなかつたけれど、そんなことは言い訳にもならない。先生は僕達のせいで、この学校を去ることになってしまったの

だから。

僕もエイジも、勿論ミサキだって言つことを素直に聞かない悪ガキ、というわけでもなかつたけれど、その日は真っ直ぐ家に帰ることなんて出来なかつた。台風が近づいてきているということがどうしてあんなにも胸を躍らせたのか、今となつてはほんの少しも分からない。

僕とエイジとミサキと、あと誰がいたかは忘れてしまつたけれど、その時仲が良かつた数人は前日に打ち合わせをしていた通り、こつそりと人通りの少ない路地裏を縫つて、下校するルートとは逆方向にある浜辺へと向かつた。そして着くなり、靴と靴下を一緒に脱ぎ捨て、いつもよりもどこか豪快で、気持ちの悪い風が吹く海へと近付いた。みんな水着を用意してはいたけれど、さすがに入らうと思うことはなかつた。

果たして、そのことに何の違いがあつたのか。危険なことには変わりなかつたのに。

その海は地元の人もなかなか行かない、ちょっとした穴場だつた。それがまずかつた。

勿論海の家だつてないし、監視員の一人もいない。台風の前日で、子供が海に入らないようにと、大人達が絶対に張り込みにきているとあらかじめ予想しておいた結果だつた。

僕達は、自分達の他に誰もいない海を、まるで貸切りをしたみたいな気分になりながら、裸足のまま浜辺で遊んだ。風が強くなつて波が荒れ始めても、まだ大丈夫と、勝手に決め込んで遊んでいた。完璧に浮かれていた。

どれくらいの時間が経つた頃だつたろう。

ミサキが大きなくしゃみを3回、間髪を入れずに放つた。それが合図だつたかのように、僕達は突然風が思つたよりも強くなつてきていることに気が付いた。

初めて、焦った。

もう帰ろうと、誰かが言つた。波が心なしか、高くなつてきている気がする。

僕達は急いで浜辺へと上がり、浜辺の奥の方まで引っ込んだ。ここまで来れば、今ぐらいなら波もそうそいやつては来ないだろう。そういうことにして、用意していたタオルで脚を急いで拭いた。僕が靴を履き終えようとしている時だつた。

「あれ！ ちょっと見ろよ！」

エイジが叫んだ。普段の彼なら出すはずのない高い声だつた。

あまりにも切迫した様子で、僕には最初エイジが何を言いたいのか分からなかつた。エイジが指さした方を、じつと目を凝らしてみる。

それに気付いた時、僕は鳥肌が立つた。

「女の子だ！ 赤いランドセル！」

エイジが、そう叫んだ。他の誰かが、やべえよ、と震えた声で戦わなな憚いた。

あれは、今思うと、本当に赤いランドセルだつたのかは分からない。もしかしたら、赤い色をした別の何かだつたのかもしれない。でも、その時の僕らはその赤いものを赤いランドセルだとすぐに思い込んでしまつた。エイジの声があつたからかもしれない。いずれにしても、その時僕らの目の前にあつたのは、赤いランドセルを背負つた女の子が溺れているという事実だつた。

エイジの行動は早かつた。もう靴も履き終わつてランドセルまで背負つていたといつのに、また靴を脱いでランドセルと服とを脱ぎ捨て、勢い良く浜辺を走りながら海へと飛び込んだ。

僕はそれを、どこか別の世界で起こつてゐる出来事を見るような目で見ていたと思う。他のみんなも同じだつたかもしれない。誰も、エイジの後に続こうとはしなかつた。そして誰も、エイジを止めようともしなかつた。

エイジはクラスで一番運動神経が良かつた。泳ぐのもとても上手

くて、他のクラスメイトとは比べ物にならない実力を持つていた。
エイジなら、きっと大丈夫だろ？と僕は思っていたのかもしれない。
エイジは一見無理なことでも持ち前の度胸と潜在能力を存分に
發揮して、あらゆる不可能を可能にする男だ。その経験が、僕にそ
う思わせていたのかもしれない。

エイジに頑張れと応援する応援団が、即興で作られた。

彼ならきっと溺れている女の子も救つて、何事もなかつたように
帰つてきて。

ああ、そんな凄い奴と自分は親友なんだと、その時僕はなぜか涙
を流すほどに誇らしい気分でいっぱいだつた。

頑張れ。エイジ頑張れ。

子供達の声が、風にかき消されながらじきました。

異変に気付いたのは果たして誰だつたるつ。

僕はエイジがこつちへ向かつて泳いでいるとばかり思つていた。誰かが何かがおかしいと咳くまで、僕は笑顔を浮かべていたりなんかもしていた。

僕はそのことに気付いた。背筋に怖気が走るのを感じた。エイジが溺れていた。

……やばい。

僕はことの重大さを瞬時に理解していたはずだった。誰か、大人に助けを呼ばなくてはいけない。そのことを頭の中では分かっていたはずだった。

でも、その時の僕に出来たことといえば、呆然と海の彼方を見つめることだけだった。

助けを、呼ばなくては。

そうだ、誰かを呼んでこなくては。エイジが、エイジが溺れてしまつ。

エイジが死んでしまつ……。

死んでしまう。

……やばい。

やばい！！

僕は叫んだ。

誰か助けてっ！！

僕の声は震えていて、正しく言葉を紡ぐことさえ出来なかつた。

それでもやつとの思いで叫んだ声に、触発されたように他のみんなも助けを呼び始めた。誰か助けて、と泣き叫ぶ子供達の声が、海に渦巻いた。

誰も来ないことに舌打ちした友達が、助けを呼んでくる、と浜

辺に僕とミサキを残して他のみんなを連れて道路へと向かった。

僕は相変わらず、めくれあがつた声で助けて、助けてと繰り返していた。それはミサキも同じだった。早くしないとエイジが……

エイジが、

……エイジ？

その光景を、僕は見てしまった。ミサキだって見てしまったらう。

遠く、取り返しのつかない距離を空けた海の向こう。

海に沈んでいく、エイジの右腕。

大人達がやつてきた時はもう全てが手遅れだった。

浜辺にどかどかと大人達が乗り込んできた時、僕とミサキは力なくへたり込んで、意味もない言葉を連呼させながら、泣き叫んでいたという。

その辺りの記憶ははっきりとしていない。青くて黒い海を前に、泣き叫んだことは覚えている。そこからどうやって家に帰ったのか、それはまるで分からない。

気付いた時、僕は家のベッドの中にいた。

瞬間、僕は悟った。

夢だ。怖い夢だ。そうだ、そんなバカな話があるわけない。

安心しきった顔で、二階の僕の部屋から一階に降りた時、僕を待つていたのは神妙な面持ちの両親だった。

父親が、降りてきた僕に告げた。

台風がやって来て海が大荒れだ、と。エイジの搜索が打ち切られたらしい、と。

汗だくになりながら、目を覚ます。

僕は町役場の、護人用に用意された部屋の中で、一人肩を揺らし

ながら息をしていた。

気持ちが、とても悪い……。

僕は口を押さえながらトイレへと駆け込んだ。

一気に吐き出すことが出来ても、それは単に食べたものを吐き出すだけのことで、もしも僕が抱えている何もかもを吐き出すことが出来れば、とても楽なのに、と少し思う。

それはそう簡単に許されることではなかつたようで、僕の中には片付けることの出来ないわだかまりが残つた。それは、決して消えないものに思えた。

僕は気持ち悪い汗を滴らせながら、ゆっくりと町役場の窓を開ける。

護人の仕事をしながら僕の中に浮かんだ一つの案を、決行することにした。そうすれば楽になれるかもと、期待していたのかもしれない。

逃げ。逃げだと思う。

窓からこつそりと抜け出して、僕は夜の町を妖怪のように徘徊した。

夜の海は、恐怖の一言に過ぎない。

地平線と水平線の境界が分からない。そのことが、とてつもない恐怖として僕には映つた。波の音も、激しく身震いをさせてくるばかりで、僕に安らかなものを与えてくれることはなかつた。エイジの命を奪つた、憎らしいはずの海。僕はあの日以来、海に入ることが怖くて出来なくなつてしまつていた。海は僕からもあらゆるものを持つてきた。

そんな怖い海も、僕には今、とてつもなく愛しいものに思えていた。目の前のそれが怖いものであることが、ただひたすらに嬉しかった。

「こいつなら、きっと。

僕は浜辺を下り始めるとい、押し寄せる波を手で掬つてみた。
ねつとりと纏わりつくように、指と指の間から肘へと雲が抜ける。
妙に冷たく思えた海の水も、その頃には体温と同じだった。

僕は、その時、意を決した。

こいつなら、きっと、僕を殺してくれるだろう。

海へと進む。

ざぶざぶと音を立てながら僕は海へと向かつて歩き続けた。不思議と、恐怖はなかつた。ただ、安らかな思いでいっぱいだつた。
進みながら、僕はいろんなことを吐き出してしまえる思いがした。
荒れ狂う海に向かつていくエイジを、止めることが出来なかつたこと。それ以前に、あの頃から僕がエイジに密かに抱いていた、嫉妬と羨望。

ミサキを犯そうとしたこと。こんなにもミサキが大好きだというのに、彼女を悲しませることしか出来ないような自分。独り善がりの醜い塊。

僕はこれから、一体どれくらいのものを失つて、どれくらいのものを奪い続けるのか。それを考えた時、僕は生きしていくことが虚しくなつた。誰にも何も与えられず、与えられたものは失い続け、そして他人からは奪い続ける。そんな自分は死んでしまえばいいと、心からそう思えた自分が、最後まで悲しかつた。

海の水は、腰まで浸かり始めていた。

その時だつた。

僕は無数の人影が、海から浜辺に向かつて登つていいくのを感じた。それはぼんやりとした影で、視界の端にすりつくな、そんな不透明な像を象つていた。

辺りに霧が立ち込める。明らかに異形の世界だった。

でも僕は、きっとここはあちら側の入り口だと妙に安心した気持ちで、その場にいた。海の水はもう、胸の辺りまで達している。この時、僕は海に全く波がなくなっているということに、やっと気付いた。

僕は確信した。これで、向こう側へ逝ける。

僕は笑っていたと思う。

「お兄さん、どうしてこんな所にいるの？」

突然の声に、僕はふと我に帰った。妙に高くて子供っぽい、実体を持つたような声が聞こえたような気がする。

「こひこひこひ」

ふと見ると、水平になった海の上を、狐を象ったようなお面を被り、白と藍色の甚兵衛を着て、右手には風車を持った男の子が、ひつそりと立っていた。

「お兄さん、生きてるんでしょ。こちに来たらダメだよ」
男の子は当然のように僕に左手を差し伸べてきて、早く帰らないと、と僕に右手を出すように促した。

「……いや、僕は戻れない。僕はもう、死にたい」

僕は拒む。もう今さら、もといた場所に戻る気にはなれなかつた。「バカなこと言つちゃいけないよ。こちちは逃げてくるような場所じゃない。しっかりとお兄さんは自分の現実に向き合つて、それからじやないところちも受け入れられないよ。お兄さんだつて、本当にこれでいいなんて思つてないでしょ？」

それは、その通りなかもしかつた。これは最悪の選択だと思う。それを自ら望んでやろうとしていたわけだけれど、突き詰めたら迷い始めるから、考えないようにしていただけなのは確かだつた。

「僕は……ひどい奴なんだ。ひどいことばかりして。こんな奴に生きる資格なんかないって言つんなら、ぶつ殺すよ？」

あまりにも醒めた声だったから、僕は思わず怯んだ。

「ほら、死ぬのはやっぱり怖い。そんな薄っぺらい覚悟しか持つてない人が来ていいような場所じゃないんだから。ほら、戻るよ」

僕は男の子に連れられるようにして、濃い霧の中を進んだ。霧は既に辺りに遠慮なく立ち込めて、もう前も後ろも分からなかつた。ここが海なのかさえも、怪しくなつてくる。僕は、本当に異世界に取り込まれてしまつたのかもしれなかつた。

そう思つた途端、今さら怖くなつた。

突然、戻りたいと本氣で思つた。

「お兄さん、戻つたら何がしたい？」

男の子の声が、唯一僕を正気に繋いでいた。この子がいなければ、僕はとつぐに発狂していただろつ。

「そうだな……。謝りたいかな」

「そつか。じゃあしつかりと謝つてこなきや。それだけを今は考えなよ」

謝りたい。そう思つた途端に、いろんな顔が頭の中に浮かんだ。親や友達や、ミサキ。僕はやつぱり逃げ出そつとしていたんだと悟つた。謝ることも向き合つこともせずに、一人で逃げ出すのは卑怯だと、今はそう思つことが出来た。

「お兄さんは自分がひどい奴だつて言つたけど、みんなそんなもんだよ。でも、みんなそこからどうしたらいいかつて悩んでる。逃げ出す人もいるし、向き合つ人もいる。お兄さんは向き合つことに決めたんだから、最後まで向き合になよ」

難しい話はこれでおしまい、と男の子は初めて子供らしい口調で話を終わらせた。どうにも、自分よりも小さな子供に説教されてしまつたことは、氣恥ずかしい。死者は子供でも、いろんなことが分かつているのだろうか、などとよく分からないことを僕は考えていた。それくらいの余裕を持つるくらいには、どうやら回復したらしい。

死のうだなんて、わざわまでの僕は、やつぱりどうつかしていたんだろう。やう決めることにした。

「ここでお別れだね」

はつきりとした色を持つて、大地が目の前に現れた。霧が濃いせいで、この向こうに何があるのかは分からぬけれど。

男子が手を放す。

「このまま進めば、きっと戻れるよ。僕はこれから行かなきゃいけないところがあるから、ここでお別れ」

男子の声は、少し寂しそうだった。

「ありがとう。本当に」

「ううん。気にしないでよ。あと、最後に重要なことを言つから。ここから先は、絶対に振り返っちゃだめだからね。前を向いて、前だけを向いて進むんだ。何があつても絶対に振り向かないで。絶対だよ。絶対だからね」

妙に念を押してくる。僕はその勢いに気圧されて、意味もなく何度も頷いてしまつた。

「それじゃあ、さよなら」

男子は僕の背中を押すと、一緒に来ることなく、その場に留まつた。

僕は前へと進む。

言われた通り、振り返ることなく。

三歩くらい、歩いた時だつた。その声は突然、後ろから響いた。

「ミサキのこと、よのこへな」

男子の声だった。僕は息を呑んで、一瞬振り向きたくなつた。

「振り向くな！ そのままだ。そのまま聞け。」

僕にはそれが、泣き叫んでいるみたいに聞こえた。

僕は前へと進む。

「紅茶、ありがとう。すっしゃく美味かった」

進む。

「毎年、来てくれて、ありがとう。お前ら、大きくなつたよな。お前達は、ずっとずっと、これからもずっと、生きてくれ。生き抜いてくれ

進む。

「幸せになれよ。いつか本当に幸せになつて、ビッグだつ、て俺に自己達は、ここに来てよ」

僕は走り始めた。前だけを見て、全力で走る。涙が頬を伝つた。

「ミサキを泣かせるなよ。絶対だからなつ

声が遠のく。僕は嗚咽を我慢しながら、転びだつになりながら、それでも走つた。

「じゃあなつ！ 頑張れよつー！ じゃあなつー！」

ツカサがないと聞いて大騒ぎをしたのは勿論ミサキで、最初は軽く考えていた町の人々も、本当に見つからないと気付き始めて慌てだした。

町の老人は口々に言った。これは本当に、海から来た悪霊に持つて行かれてしまったのかもしないと。縁起でもないと諭す人々も、その顔はどこか不安そうだった。実際、この町では夏にそのまま行方不明になる人がいたという記録がちらほらとある。そのことが尚さら、人々を不安にさせた。

ミサキは半狂乱になって探したという。

それを聞いた時、僕は本当に申し訳なかつたと、素直にそう感じた。

「ツカサっ！ ここにいるのっー？」

勢い良く開け放たれたドアの先には、ミサキが立っていた。その後ろに、中学の時の同級生が何人か続いている。

僕は小さく、湿つた床の上で体を濡らしながら、震える息を連續させていた。

「しつかりして！ ツカサ！」

温かい感触が、した。肩を掴むミサキの手が、突然いとおしく思えた。

僕の中で、小さく何かがはち切れて、その直後に嘘みたいな涙が溢れ出した。嗚咽も止まらない。目の前が海の中で目を開いたみたいに、どこまでも滲む。

「ツカサ……？」

僕は、ミサキを力いっぱい抱き締めた。泣き声が止まらないことも気にせずに。

ミサキは暫く呆けた顔をしていたけれど、その後で僕を優しく抱き返してくれた。

使い古されて、誰もいないはずの公民館に、僕はいた。

墓地の近くにある、例の幽霊屋敷。

それだけでも僕が幽霊にさらわれたと噂されるには十分だつた。それ以上に不気味だつたのは、僕がいた場所というのが公民館内の浴場で、もう水も通つてないというのに、大きな浴槽の中には生温くなつた水がどっぷりと入つていたということだつた。

おまけにこの水が、妙に黒い。

子供達が聞けば鳥肌を立てさせるような怪談が、見事に成立してしまつた。

僕は突然、神隠しになりかけた人間として町で有名になつてしまつた。状況を考えれば当然のことだと思つ。怖すぎる。僕が発見された時のことを見つから聞いただけでも、誰だつて同じことを考えるだろう。

ところが肝心な僕はといえば、一体何故あそこにいたのか全く思い出せなかつた。

本気で、神隠しに遭いそうだったのかもしれない。僕の背筋にだんだんと怖気が走つてきだが、考えないことにした。

町の人々の反応はまちまちで、気持ちが悪い腫れ物を扱うように僕に接する老人もいれば、神隠しに打ち勝つたと縁起物みたいにして僕を祭り上げる老人もいた。同級生くらいは、いい話題のタネとして僕を格好のいじられキャラにしたり、ミサキに泣きついたという噂を聞きつけて、超級に情けない男の代名詞を僕に授けたりしてきた。

父親からは、心配かけさせるなと一発怒鳴られただけで、それだけだった。母親なんてけろっとしている。

一番心配してたらしいミサキは、僕に散々バカバカと喚いた後で、ぐつすりと眠ってしまった。こればっかりは、とても胸が痛んだから、あとで一緒にお祭りに出掛けた時に、何かお詫びをしようと思う。

それにしても、僕はどうしてあんな所にいたのだろう。

思い出せない。

浴衣姿で現れたミサキは妙に可愛くて、僕はやばいなあと内心で焦っていた。そんな僕の気を知つてか知らずか、ミサキは早く行こうと僕の手を取つて歩き出す。

お祭りはかなりの盛況で、僕とミサキは人込みに思い切り揉みくちゃにされて、やつと落ち着けた頃にはお互いで2回戦目を交えた後の如くに疲れていた。

「もう、ダメかもしない……」

ミサキが苦笑いをしながら囁つ。僕もそれに合わせて小さく笑つた。

座れる場所を見つけて、僕達はそこへと移動する。

一人で、買つてきた焼きソバを食べる。買つてから食べられるような場所に着くまでに随分とかかってしまったから、もうかなり冷めてしまっていた。

「でも美味しいよね

ミサキが笑つているから、それでいいような気がした。でも、正直言つて僕には冷めた焼きソバが美味しいとは思えなかつた。食べ終わると、ミサキが僕の肩に頭を寄せてきた。

いわゆるまつたりモードに突入したわけだけど、僕にはやらなければならぬことがあった。意を決して、ミサキに話し掛ける。

「昨日は、ホントにごめん。どうかしてた」

僕は、頭を下げる。本気で謝りたかった。

「……いいよ。私が悪かったんだから」

「いや、原因はどうあれ、あれは本当に僕が悪かった。本当にごめん」

思い出し始めるが、どんどん僕は自分が許せなくなってきた。歯を食いしばって、今はミサキに謝り続けることに徹しようと、拳を握る。

「……うん。分かった。もう一度としないでね。それを約束してくれれるなら、いいよ。もう一回やつたら、私、ツカサを捨てる」

「…………」

「これで、いい？」

「…………」

「……ホントは怖かったんだから。昨日……」

「……わかった。それで頼むよ」

訣然としないのは、仕方がないかもしない。本当はどう言つて欲しかったのかなんて僕には分からぬ。ただ、もう僕は一度とミサキを無理矢理に押し倒したりはしない、そういうホントに当たり前な約束が交わされたという結果はあった。

僕達一人の恋愛は、もうこれ以上に発展しないかもしないし、僕が決定的なものを破つてしまつたことで、お互の距離はこれまで通りにはいかないかもしない。逆もないことはないかも知れないけれど、それにはきっと凄く時間がかかると思つ。

「これで、いいんだ。」

僕は、どのような結果にならうと、ミサキとこれからも付き合つていいくことに決めた。最初はここで別れてしまおうと思つていたけれど、途中で逃げ出したら、それは卑怯な気がした。僕は僕なりの

責任を果たすべきなんだろう。

妙にさつぱりとした自分に、僕は少し不思議な感じがした。

花火が上がった。

偶然だけれど、僕達の座つている場所からとてもよく見えた。

僕が間抜けな大口を開けて上を見ていると、ミサキが手を握つてきた。

「私も、もつとこれからは、ツカサに迷惑をかけないように、頑張るから」

「……うん」

「もっと一緒にいたい。お願ひだから、ツカサまでいなくならないで」

「……」

ミサキは寂しかったのかもしれない。自分の前から、当たり前と思つていた人が消えてしまつのが。エイジは、ミサキのお兄さんで。生まれた時から一緒にいた兄妹で。

先に、いなくなつてしまつて。

僕はエイジが死んだ後の、ミサキ一人には広すぎる部屋の中で、エイジの持ち物が悲しく持ち主の帰りを待つていたのを思い出した。ミサキは毎晩ずっと、一人でその部屋で眠ることに苦しみ続けてきたのかもしれない。

今でもずっと、ミサキの部屋の中に生きているエイジの形見。それをずっと残しているミサキの気持ち。

それを僕は前に、事もあるうか、早く捨ててしまえばいいのにと思つたことがあつた。

僕は、純粹に、エイジに嫉妬をしていたんだと、今はっきりと分かつた。

そして、ミサキの中に、僕が越えられないと思つていた壁なんて、最初からなかつたということにも。

「エイジのことは、頑張つて忘れる」

ほらみる、と僕は僕に言つてやりたくなつた。しまいにはこんな悲しいことをミサキに言わせてしまつた。こんなことを、ミサキに言わせたかつたわけじゃない。

僕は首を振つた。

「忘れるなよ。ごめん。全部、僕のせいなんだな」

昨日、同じようなことをミサキに言われたような気がした。何がミサキのせいなもんか。

どう言えばいいだろう。僕は逡巡する。

「エイジのことは、ずっと覚えてよう。僕は頑張つて、ミサキこれからも頑張つて、それで……エイジの墓の前で、どうだつて自慢しにいかなきやいけないんだから」

「へ？」

「心配するなつて。僕がついてるから、ミサキの心配はするなつて」
僕は、やつと、自分の中にあつた汚らしいものに別れを告げることが出来た気がした。

「……何それえ」

吹きだした後で、ミサキの顔がゆるやかに笑顔に変わつていいく。

「いいじゃん。もうこうこうクさい話はおしまい」

「本当にクさいよね。何、そういうこと言う人だつたの、ツカサつて？」

「もう忘れてくれ。もういいから」

「すつごい面白かった」

「ああもつ」

周りにいつの間にか出来ていた人だからに、ご馳走様でしたと言

わからぬながら、結局僕達はまた場所の移動を開始する羽目になつた。

花火が、立て続けに上がる。

それにしても本当に恥ずかしかつた。どうしてあんな言葉が出てきたのか、さっぱり分からぬ。思い出すと、顔から火が出そうだ。まだ後ろで意地悪そうに笑うミサキに、頭を抱えたくなつた。一生、ネタにされるかもしれない。

「きれいだね」

やつと落ち着けた場所は、結局ミサキの部屋だつた。開け放たれた窓からは、思いの外きれいに花火が見えた。

「ミサキ、僕さ」

「何？」

「エイジのこと、ずっと憧れてたんだ」

ミサキは何も言わなかつた。

「何でも出来るしさ、すぐカツ『良かつたし。でも実は、本当は悔しかつたんだ』

「……うん」

花火の音が、こだまする。

「でも、ツカサがあ兄ちゃんみたいだつたら、私きっと好きにならなかつたよ」

「え？」

「お兄ちゃんも好きだけど、それだけなんだから。ツカサは、それ以上に大好きなんだからね、私は」

その時、大きな花火がどかつと爆発して、彼女の顔を照らした。

「キス、しようよ。いいでしょ？」

僕達は、自然に唇を合わせた。ミサキが腕を回して、僕の頭の後ろで組んだ。

離れた後で、ミサキが顔を赤くしながら、ボソッと零す。

「ツカサは、ツカサだよ」

ああ、と思った。やっほり、ミサキはとても可愛い。

僕達は、静かに抱き合つたまま、花火を見続けた。

来年も、こうやってミサキと一緒に花火を見ていたいと、純粋にそう思った。その時は、エイジのお墓に、冷えた紅茶を持っていく。

お祭りの喧騒と、花火の音を聞きながら、僕達はもう一度キスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6802c/>

海送り -sea saw-

2010年10月15日23時02分発行